

①

国語

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「言って聞かせること」ことはで伝えることが理解できるようになることを教育というなら、教育が始まるのは子どもがことばを使い始める歳くらいということになります。しかし実は、^①言葉を話し始める前から、子どもは「教育」によって学んでいる。しかもそれは大人の側では「教育」などと思っていない何気ない行動から「教育」されていることをチアラとゲルゲリーは知りました。

まだ1歳の子どもの目の前に、二つの、どちらも子どもにとってミミヨク的な物を、一つは左側、もう一つは右側に置きます。一人目の実験者がその品物の反対側から子どものほうを向いて、はじめに子どもと目と目を合わせてから、そのうちの一方に視線を向けます。すると子どもは先ほどの視線追従をしてそちらのほうを向きます。次に一人目の実験者はそのままその場を去り、しばらくして二人目の実験者がやってくる。その二つの物を画面で見比べ、どつちをどつちか迷ったふりをします。すると子どもは、第一の実験者が視線を向けたほうを指差して、どつちを選ばなよというしくみをします。

かわいらしいしくみではありますが、そんなのはあたりまえだろうとも思うかもしれませんね。こは準備段階です。次に子どもはどつて、好き嫌いにちよつと選いのあるものを左右に置きます。

ⅰある子どもは赤い物のほうが青い物よりも好きだとした。同じ形をした赤い物と青い物を置くわけだ。ⅱ第一の実験者は、やはりはじめに子どもと目を合わせてから、子どもがあまり好きでないほうの色ⅲこの場合は青いほうを見ます。ⅳ子どもはどつちと同じように青いほうに視線を追従します。さて、やはり第一実験者は立ち去り、第二の実験者が来て、先と同じようにどちらをとるか迷ったふりをしたとき、子どもはどちらを指差すでしょう。自分の好きな赤いほうでしょうか、それとも第二の実験者が見つめた青いほうでしょうか。^②子どもは、自分の好きな赤いほうではなく、第一の実験者が見て視線追従した青いほうをさす側台のほうが多いのです。これが先に示したように、はじめに第二実験者が、子どもと目を合わせることなく、一人で勝手に子どもの好きでないほうを見て立ち去るようすを見せた場合は、第二の実験者が来たときに子どもが指差すのは、圧倒的に子ども自身が好きな色でした。

これはおそらく、子どもが第一実験者が視線を使ってわざわざ自分に注意を促して見せたりするのは「選ばれるべきもの」個人的好みではなく「客観的に価値のあるもの」とみなして、それを第三者に教えるようとしているのだと考えられます。自分自身の好みを相手に伝えるのではなく、自分の好みとは別次元の客観的・普遍的価値基準を、この年齢の子どもは大人のなるまいから察し、そしてそれを他者に伝えようとしているのです。このような大人と子どもの自然なやり取りの中で生じている「教育」の機能を、チアラとゲルゲリーは「ナチュラル・ベタゴジー」つまり「自然の教育」と名づけました。

このナチュラル・ベタゴジー実験が示唆していることから、みかけのささやかさは逆に、

問一 空欄ⅰ、ⅱ、ⅲ、ⅳに入る最適な言葉は次のア～カから選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア そして イ たとえば ウ すると
エ しかし オ つまり カ もちろん

問二 傍線部①「言葉を話し始める前から、子どもは『教育』によって学んでいる」とあるが、筆者はいつ頃から学んでいると考えているか。「から」につながる形で本文中から十字で抜き出せ。

問三 傍線部②「子どもは、自分の好きな赤いほうではなく、第一の実験者が見て視線追従した青いほうをさす側台のほうが多い」とあるが、それは子どもがどのように感じているからか。本文中の言葉を用いて三十字以内で説明せよ。

問四 二重傍線部A「あたりまえ」とは、どういうことか。本文中の言葉を用いて三十字以内で答えよ。

問五 本文中で述べられていることとして正しいものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

ア 人間は自己中心的な考えの動物であるが、おなかがすいたときに子どもが泣くのは他者と協力するための規範的行動であるといえる。
イ 人間の子どもは、生まれた時から他者に教わる能力と他者に教えるようにする能力を持っていて、他の動物は持ち得ない能力である。
ウ 子どもは言葉を話すようになる前から大人の何気ない行動に学んでおり、そこには個人を超えたコミュニケーションがあると考えられる。
エ チアラとゲルゲリーは、自然なやり取りの中で教育が生まれていることを立証し、認知症患者の知識や善悪の判断基準について新しい見解を述べた。
オ 子どもが自分の好きなものよりも大人が示したものを視線追従した実験から、大人は自分の価値を無意識に子どもに押し付けていると考えられる。

問六 傍線部③「ヒトはおそらく生物学的に『公的』な世界を意識し、『私的』な世界との折り合いをつけようとする動物なのではないか」といえるのはなぜか。五十字以内で説明せよ。

②

人間の本質に関わるきわめて重要な意味を持っています。まずヒトの子どもはかなり小さいとき、ひょつとしたら生まれたときから、他者から何かを教わる能力を持っていると同時に、他者に何かを教えるようにする能力も持っているということが読み取れます。

気がついてみれば、あたりまえのことですが、教えによって学ぶことができるためには、教える能力と教わって学ぶ能力の両方がなければなりません。進化の過程で教える能力だけが、^④カクされ、そこから教わる能力が二次的に派生したとか、逆に教わる能力だけが進化の過程で発生し、そこから教えるという行為が派明されたとは考えにくいとは思いませんか。つまり教育する心の動きと教育によって学ぶ心の動きは、進化の過程で同時にカクトクされていなければならない相補性があるのだと思われます。

さらに重要なことは、こんなに小さいときに現れているこうしたコミュニケーションを通じて伝えられている情報が、それを伝える大人にとつても子どもにとつても、「私個人」の好き嫌いではなく、「よいもの」であるという「規範性」を持つたもの、あるいは特定の個人だけにあてはまる知識ではなく、「一般性」のある知識として伝えられているということです。

ただのコミュニケーションならば、「私はこれが好きだ」とか「私はあれがほしい」とか「私はいまう感じる」「私は不快だ」のように、「私」だけのことを相手に伝えればよい。オムツがよつれたり、おなかがすいたりしたときに子どもが泣くのは、まさにそういう個人的で「利己的」なメッセージです。しかしもし他者とのコミュニケーションで伝えている情報が、個人を超えた「一般性」「規範性」を持つものであるとしたら、しかもそれを互重的に伝え合うことを、生まれて間もないころからできるというのが誰かだとしたら、さらにそれが教育を成り立たせている心の動きの原点にあるとしたら、それは極めて重要な発見であるといえるでしょう。

人間は、どうしてもなく利己的で、己の利益になることを最優先に考える動物のようですが、実はこんな形で、かなり早いときから、自分個人を超えた一般的知識の世界の中に住む能力を備えていると考えられるのです。これは人間における「公と私」の問題にかかわる重要な知見だといえるでしょう。ヒトはかなり小さいころから、家族や友達などの間で決まりごとやゲームのルールのあることに気づき、それにしたがってふるまうようになり、その決まりに従わない人を非難したり罰したりしようとしています。認知症になつて、自分の家族すらわからなくなった人でも、一般的な知識や善悪の判断基準などはちゃんと残っている場合があります。^⑤ヒトはおそらく生物学的に「公的」な世界を意識し、「私的」な世界との折り合いをつけようとする動物なのではないかと思わされます。

(安藤泰康『なぜヒトは学ぶのか 教育を生物学的に考える』)

(注) 視線追従…相手の視線を追いかけて、その対象を 緒に見ようとすること。

問一 波線部a、eの片仮名を漢字に、漢字を平仮名にそれぞれ改めよ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

時代は昭和初期、^①「私」の家の中には、^②鳥が若々しく生い茂っている。家中の手伝いに雇われた老女^{まき}は、一度の難病を子どもも持たない孤獨な身の上であつ、行き處を生つた感情をその鳥へと向けていた。ある日「私」は、その門の外でまきと誰かと言ひ争っていることに気づき、玄關處に出てそのやりとりを耳を傾ける。

「ええええ、ほんとに、あたしじゃないのかわ。よそのすま。そしてそのよそのす、あたし知つてるよ」

早急な口調で言つてゐるのはこの先の町の葉茶屋の少女ひろ子である。遊び友達らしい子供の四五人の声で、くすくす笑つのが少し遠く聞える。

「嘘だろー！ 両手を出してお見せ」と言つたのは老いたまきの声である。もうたいお返答し返しされて多少自信を失つたまきはしどろもどろの調子である。

「はい」少女はわざと、いふことを素直に聴く良し子らしい声音を装つて返事しながら立派に大きく両手を突出した様子が鳥の門を越した何ごに感じられた。なままた^③トウワクしたまきの表情が私に想像される。老婢は「ふーむ」となつた。

まだ、くすくす笑つ子供たちの声が聞こえる。
私も何だか微笑が出た。ちよつと間を置いて、まきは勢いづき

「じゃ、この鳥の芽をちよんきつたのは誰だ。え、それを言つてごらん。え、誰だよ、そら言えまい」「あら、言えてよ。けど言わないわ。言えはおばさんに叱られるのわかつてゐるでしょう。叱られることわかつてゐながら言うなんて、いくと子供だつて不人情だわ」

「不人情 ははははは」と女の子たちは、ひろ子の使つた大人らしい言葉が面白かつたか、男のような声をたてて一せいに笑つた。

まきはいきり立つて「……この子たち口減らすといつたら——」まきの憤慨している様子が私にも想像されたが、すべてのものから孤獨へばかり捨てられたこの老女は、やはり不人情の一言にはかなり刺激を受けたい。「早く向こうへ行つて。おまえなど女弁士にでもおなり」と叱り散らした。

もう、そのとき、ひろ子はじめ連れの子供たちは逃げかかつていて、老婢より相別離れていた。老婢はまた機嫌して壁ぐに如くはないと^④氣を要えたらしく、強いて優しい声を投げた。

「ねえ、みんな、おまえさんちらしい子だから、この鳥の芽を摘みんじやないよ。ほんとに頼むよ」さすがの子供たちも「ああ」とか「うん」とか生返事しながら踵を返す足音がした。やつと私は滑戸を開けて表へ出てみた。

「はあや、どうしたの」

「まあ、奥さま、ご覧はせ。〴〵からしつたさうさいせん。ひろ子が悪鬼大将で鳥の芽をこんなにしてしまつたのでございます。わたくし、親の家へ怒鳴り込んでやろうと思つてゐるんでございます」

指したのを見ると、門の鳥は、子供の手の届く高さの横一文字の線にむしり取られて、髪のおかつはさんの短い前髪のように揃つてゐた。進行を違つて刈り過ぎた理髪のように軽佻で滑稽にも見えた。私はむつとつて「なんという、ひどいこと。いくら子供だつて」と言つたが、子供の手の届く範囲を示して子供の背丈だけに摘み揃つてゐる鳥の芽の摘み取られ方には、悪戯でも

③

④

⑤

やっぱり子供らしい自然さが現れていて、思い返さずにはいられなかった。
「これより上へ短くは摘み取るまいよ。そしてそのうちには子供だから摘むのにもじき飽きたら
ろうよ」
「でも」
「まあ、いいから……」

ひろ子の家は二筋三筋ぐだたつた町通りに小さい華茶屋の店を出していた。（――中略――）
玉露の壺は単に見板で、中には何も入つてなく、上茶も飛切りは壺へ移す手数を省いて一々、静岡の仕入れ元から到着した罐張りの小箱の積みであるのをあれやこれやと探しまわつて、漸く見つけ出し、それから量つて売ってくれる。だから時間を待たせてしょうがないと老婢のまきは言った。
「おや、おまだ、まだ、あそこの店へお茶を買いに行くの」とまきはきいてみた。「あそこの店はおまへの敵役の子供がいる家じやない」
すると、まきは照れ臭そうに眼を伏せて
「はあ、でも、量りがようございますから」
と、せいぜい頭を使つて言った。④私は多少思い当る節が無いでもなかった。
鳥の芽が摘まれた事件のあつた日から老婢まきは、急に表門の方へ神経質になつて、表門の方に少しでも子供の声がすると「まだ、ひろ子のやつが――」と言つて飛び出して行つた。
事実、その後も二三回、子供たちの同じような所業があつたが、しかし、一月も経たぬうちに老婢の警戒と、また私が予言したように子供の飽きっぽさから、その事は無くなつて、門の鳥の芽は摘まれた線より新しい色彩で盛んに生え下つて来た。初鰯が鳴き金魚売りが通る。それでも子供の声がすると「まだ、ひろ子のやつが――」と度々ながらまきは駆け出して行つた。（――中略――）
私は老婢がさんざん小言をいったようなきつかけでかえつて老婢の心にあの少女が絡み、せめて少女の名でも口に吐さねは寂しいのではあるまいかと推察した。
だから、この老婢がむさわさいくつも道を遮る不便を忍んで少女の店へ茶を求めに行く気持ちも汲めなくては、老婢の拙い言い訳も強いて追及せず
「そう、それは好い。ひろ子も鳥をむしらなくなつたし、ひい、きにしておやり」
私のとりなしてやつた言葉に調子づいたものか老婢は、大ひらでひろ子の店に通い、ひろ子の店の事情をいろいろ私に話すのであつた。（――中略――）
まきの言うところによるとひろ子の店は、ひろ子の親の店には通いないが、父母は早く没し、みなし児のひろ子のために、伯母夫婦が入つて来て、家の面倒をみているのだつた。伯父は勤人で、昼は外に出て、夕方帰つた。生活力の弱きような好人物で、夜は近所の将棋所へ将棋をまじに行くのを唯一の楽しみにしている。伯母は多少気丈な女で家の中を切りまわすが、病身で、ときどき寝ついた。（――中略――）
「可哀さうに。あれで店に在ると、がらり変つた娘になつて、からいだけ切つてるのでございますよ。やっぱり本親のない子ですね」とまきは言った。
私は、やっぱり孤独は孤独を牽くのか。そして一度、老婢とその少女とが店で対談する様子が

⑥

見だくとなつた。
その目的のためでもなかつたが、私は、~~グロゼン~~少女の茶店の隣の表具店に写経の巻軸の表装をあつらえに行つて店先に腰かけていた。私が家を出るより先に花屋へ使ひに出したまきが町向うからまわつて来て、少女の店に入つた。大きな「大経師」と書いた看板がべだてになつてゐるので、まきには私のいるのが見えなかつた。表具店の主人は表装の袈地の見本を奥へ探しに行つて手間取つてゐた。都合よく、隣の家屋での喧声が私によく聞こえて来る。
「なき、今日はあたしにお茶を飲んで出さないんだよ」
まきの声は相変らず突つかかるようである。
「うちの店じゃ、二十銭以上のお買物のお客でなくちゃ、お茶を出さないのよ」
ひろ子の声も相変らず、ませている。
「いつもあんなに沢山の買物をしてやさないか。おとくいさだよ。一度くらい少ない買物だつて、お茶を出すもんですよ」
「わからないのね、おばさんは。いつもは二十銭以上のお買物だから出すけど、今日は茶持池の土瓶の口金一つ七銭のお買物だからお茶は出せないじゃないの」
「お茶は四五日前に買いに来たのを知つてゐたろ。まだ、うちに沢山あるから買わないんだよ。今度、無くなつたらまた沢山買いに来ます。お茶を出さない」
「そんなこと、おばさんいくらいつても、うちのお店の規則ですから、七銭のお買物のお客さまにはお茶出せないわ」
「なんて因果な娘つ子だろ〜」
老婢は苦笑しながら立ち上がりかけた。こゝでちよつと私の心をひく場面があつた。
老婢の店を出て行くのに、ひろ子は聲をかけた。
「おばさん、浴衣の背筋の縫目が横に曲つていてよ。直したげるわ」
老婢は一度「まあいいよ」と無意味に言つたが、やっぱり少し後へ戻つたらしい。それを直してやりながら少女は老婢に何か囁いたよすがが私には聞こえなかつた。それから老婢の⑤「感概深」
そんな顔をして私の前を通つて行くのが見える。私がいるのに気がつかなくなつたほど老婢は何か思い入つていた。
ひろ子が何を囁いて何をまきが思い入つたのか家へ帰つてから私が聞くと、まきは言つた。「おばさんごめんささいね。きょう家の人たち奥で見ているもんだから、お店の規則破れないのよ。破るととてもうるさいのよ。わかつて」ひろ子はまきの浴衣の背筋を直すふりして小声で言つたのださうである。まきはそれを私に告げてから言い足した。
「なあに。あの悪戯つ子がお茶飲んで出す格好が早熟でて面白んで、お茶出せ、出せと、いつも私は言うんでございますがね、今日のように伯母夫婦に気兼ねするんじや、まつたく、あれじゃ、外へ出て悪戯でもしなきゃ、ひろ子も身がたまりませんです」

（岡本かの子「鳥の門」）

※作題の都合上、本文の一部を省略し、表記を改めた。

（注1）老婢…年をとつた女中のこと。
（注2）女弁士…女性の歌謡家、あるいは政治的な演説をする人。

（注3）如くはない…それが最もよいということ。
（注4）軽佻…考えが浅く、調子にのつて行動する様子。
（注5）大ひら…人目をばからないさま。おおつぱら。
（注6）みなし児…亡くなつたり行方不明となつたりして両親がいない子ども。
（注7）表具店…紙・布などをほつて、巻物・掛け物などを仕立てる店。
（注8）因果…ここでは、頭固で思いやりのないこと。

問一 波線部aとeの片仮名を漢字に、漢字を平仮名にそれぞれ改めよ。

問二 戦前に活躍した代表的な女性作家として、本文の作者である岡本かの子に加え、樋口一葉や与謝野晶子が挙げられる。この二人の作品ではないものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

ア たけくらべ イ みだれ髪 ウ 老妓抄 エ 三四郎 オ にこりえ

問三 傍線部①「気を更えた」とあるが、「まき」が「気を更えた」のはなぜか。その理由として最も適切なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

ア ひろ子のしつけのよい態度に気をはだされ、逃げかけている子どもたちをかわいそうに思い、「不人情」を避けて優しくしてやろうと思ひ直したから。
イ 堂々と自己主張するひろ子に気おされた上に、子どもたちに笑われている恥ずかしさに耐えられなくなり、二度と来てほしくないと思つたから。
ウ 子どもたちは親戚がかつてしまつていた上に、孤独な身に「不人情」との批判がこたえ、自分に対する子どもたちの誤解を解きたいと思つたから。
エ 口論を経てすっかり自信を失つていたところに、「不人情」な行いを勧めたことへの批判が身にこたえ、下手に出て囁く以外に道はないと思つたから。
オ ひろ子の巧みな対応にやりこめられた上に、人情を言い立てられて反論できなくなり、なんとかして鳥を手もたちから守りたいと思つたから。

問四 傍線部②「私は多少思い当る節が無いでもなかった」とあるが、「思い当たる節」とはどのようなことか。説明として最も適切なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

ア まきが精一杯頭を使つたのは、ひろ子を気にかけていることを「私」に気づかれたくなかつたからだということ。
イ まきが雌をついたのは、子どもが声をするたびに「ひろ子のやつが」といつて飛び出したことを恥ずかしく思っているからだということ。
ウ まきがひろ子や家の店に茶を買いに行くのは、気は強いが思いやりがある点で自分と共通していると考えたからだということ。
エ まきがひろ子の伯母夫婦の店で茶を買うのは、関わりのなかでひろ子のこと気がかかるようになったからだということ。
オ まきが子供の声をするたびに門の外へ飛び出したのは、実はひろ子の方が好きで会いたいと思つていたのであるということ。

問五 傍線部③「感慨深そうな顔」とあるが、「まき」がそのような顔をしたのはなぜか。七十字以内で説明せよ。

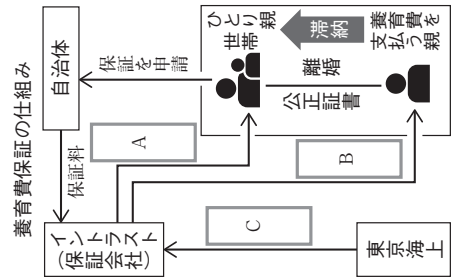
問六 本文における「鳥の芽」の描写は、子どもの無邪気さや生命力を象徴的に表現している。その描写を含む文を異なる場面から二つ抜き出し、それぞれはじめの五字を書け。ただし、句読点も字數に含める。

⑦

⑧

三 次の新聞記事を読んで、後の問いに答えよ。

東京海上日動火災保険は離婚後に困窮するひとり親世帯を減らすため、養育費を確実に受け取れるようにするサービスを保証会社のイントラスト（東京）と共同で開発した。養育費を取り決



めた公正証書を結び、受け取り側の親が自治体に申請するだけで、支払う側の親からの入金が滞つても1年分を保証する。全国の自治体にサービス導入を働きかける方針だ。

イントラストが自治体と契約を結び、自治体を保証料を贈うことで、ひとり親世帯の負担を軽くしたのが特徴という。一般的には、受け取り側の親が保証会社を自ら探し、審査を通過して契約を結ぶ

必要がある。

東京海上とイントラストのサービスでは、養育費滞納が発生すると、まずイントラストがひとり親世帯に立て替えて支払い、同時に支払う側の親に対する回収業務も行う。東京海上は養育費不払いによる損害の一定割合をイントラストに保険金として支払う仕組み。

厚生労働省の調査によると、養育費を受け取っているひとり親世帯は3割に満たず、政府は2031年に4割まで引き上げる目標掲げる。

(二〇二四・七・一四 『中日新聞』朝刊 共同通信配信)

問一 本文中の空欄A・Cに入る適切な言葉を次のア～カからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えよ。

- | | |
|------------|---------------------|
| ア 滞納分を差し引き | イ 滞納による損害を保険金として支払い |
| ウ 滞納分の回収 | エ 滞納分を立て替え |
| オ 滞納分を申請 | カ 滞納分を支払い |

問二 傍線部「3割に満たず」とはどういう状態か。最も適切なものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えよ。

- | | |
|-------------|------------|
| ア ちょうど3割である | イ 3割より少ない |
| ウ 3割以下である | エ 3割くらいである |
| オ 3割より少し多い | |

國語

一	問一	a	魅力	b	普遍	c	しさ	d	獲得
		e	りこ						
	問二	i	イ	ii	ア	iii	オ	iv	ウ
	問三	生まれて間もないころから							
	問四	例１：客観的に価値のあるもので、選ばれるべきものだと感じているから 例２：選ばれるべきもので、客観的に価値のあるものだと感じているから							
	問五	例１：学ぶには、教える能力と教わって学ぶ能力の両方が必要であること 例２：教えによって学ぶには、教える能力と教わる能力が必要であること							
	問六	ウ							
	問七	例：人間は利己的で自分本位な行動をとるが、小さいころから決まりに気づき、それにしがたってふるまうから ポイント：①人間は個人的で利己的であるが、 ②自分個人を超えた一般的知識の世界に住む能力を持っている、決まりやルールに気づき、それに従うようにふるまうということ							
二	問一	a	当惑	b	憎	c	ようや	d	つたな
		e	偶然						
	問二	エ							
	問三	オ							
	問四	エ							
	問五	ひろ子がお茶を出さないのは伯母夫婦に遠慮していたからで、ひろ子が自分に敵意を抱いていないとわかるとともに、彼女をいじらしく思ったから。							
	問六	私はむっと 事実、その							
三	問一	A	エ	B	ウ	C	イ		
	問二	イ							